



手書きのチカラ

湯川れい子

自分でも、かなりの紙好き人間だと自覚している。ニューヨーク、LA、ロンドン、ヘルシンキ、シヨッピング・モールや街角でステーションナリーのお店を見つけると、ついふらふらと入ってしまう。

そして、「重いからねー!」「かさばるし、まだ後があるからねッ!」と自分に言いながら、きれいなレター・セットやカード類、革や木表紙のノートなどがあると、「お土産に上げてもいいかしら……!」と、大量に買い込んで、後で必ず後悔するのだ。

こうしていま私が書いているのも、特製の名前入りの原稿用紙だ。この用紙を注文するようになってからでも、三十年以上になる。

ワープロに挑戦して、編集したほうが書き直すよりも楽だ、と思った頃もあつた。

たけれど、この肉厚の真新しい原稿用紙の束をドサツと机の上に置いてペンを下す瞬間の、何とも贅沢なトキメキを味わえないことに、或る日、突然気がついたので、それに特注の用紙もまだ沢山残っているし、これは勿体ない。

音楽や彫刻や絵画など、人の心に働きかけて大きな感動を与えるアートは何が、どこに働きかけるのか、そのエレメントやエネルギーを計器で測ることはできないけれど、時に聴き手や見る人の命を救ったり、人生を変えてしまつたような働きをするのは、そこに創り手の、あるいは送り手の「思い」が、エネルギーとして存在しているからだ、と私は考えている。

なら、「書」だって、そうではないがみみずがのたつたような、読み解くこともできない字を、大切に額に入れて飾つたりしているけれど、何と有名人の書というだけではない場合も多い。その読めない字が、何かを語りかけ、元気を与えてくれているのだと思ふ。

新聞や雑誌の原稿やエッセイなどは小さな出版社ほどメールで送って下さいといってくるが、私は手書きの原稿でもいいと言っているとどうもこうも、お引受



湯川れい子(ゆかわ・れいこ) 1939年、東京都生まれ。ジャズ・ポップス評論家、ラジオDJとして活躍。作詩家として「涼の太陽」「ランナウェイ」「ハリケーン」「センチメンタル・ジャーニー」「ロング・バージョン」「六本木心中」「恋におちて」「あゝ無情」など多数のヒット曲がある。日本音楽著作権協会(JASRAC)会長代行、日本作詩家協会副会長などのほか、多くの環境団体の代表、理事、顧問等をつとめる。

けない。一日に何十通と国の内外からメールが来るから、必ずPCに向かって仕事をしてくれている者は身近にいるのだが、こちらの手書き原稿の校正で、その出版社や編集者の力量が判るのも有りがたいので、わざわざメールにはしない。特に作詩などは、真つさらの原稿用紙に、「これでもか!」という思いを込めて、自分の字で清書して手渡すことにしている。それでもキャンセルを食つことはあるけれど、お礼状と同じで、「こちらの深い想いや誠意は、ワープロ打ちされた文字よりも、何倍もの強さで相手に伝わるような気がしている。

そんな風に、何十年も紙にはお世話になっているし、紙なしには生きていけない身だから、紙は大切にに使わせて頂きたいと思っている。個人情報という意味からだけではなく、可能な限り紙はシュレッターにかけてリサイクルするようにしているし、木を植える、木や森を大切にする運動には、積極的に参加している。

PAPER Q & A Vol.15

Q. 植林は、どうして地球温暖化防止に良いのですか?

A. 植林された森には、二酸化炭素をたくさん吸収する若木が多いからです。

植物は大気中の二酸化炭素を吸収し、酸素を排出します。特に、これからすくすくと育っていく若木はこの光合成を活発に行うため、成木に比べてよりたくさんの二酸化炭素を吸収します。製紙産業が行う海外植林は灌木地化した荒廃地や牧場跡地などを活用して、木の苗を植え、新しい森をつくり、育った成木を収穫し、また苗を植えることをくり返しています。このため、植林された森には常にたくさんの若木が

あり、地球温暖化の要因となる二酸化炭素の削減に貢献しています。



今回は8月2日号、服部幸應さんです。